

特別活動との連携を図る音楽学習

—小学校第5学年学芸会での実践を通して—

鈴木 慎一郎(兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科) 奥 忍(岡山大学教育学部)

本研究の目的は、特別活動の領域に属する学芸会の実践を取り上げ、子どもの表現力を高めていくための効果的な手立てを探ることにある。研究方法として、2つの仮説を設定し、特別活動に属する「学校行事」と教科に属する「音楽」との連携を図り、実践を行った。

①教師が一人ひとりの子どもに応じた支援をすれば、子どもの表現意欲を高めることができる。

②振り返る機会を設定すれば、子どもは自ら音楽にかかわり、表現力を高めることができる。

仮説の有効性を検証するために、抽出児2名の学習過程と意識の変容を観察し、分析した。その結果、仮説1に対しては朱書きや対話、仮説2に対しては自己評価や録音・録画を使用したことが、子どもの表現力を高めるのに有効に働いていることが判明し、2つの仮説の有効性が検証された。

キーワード: 学芸会, ミュージカル, 子どもの音楽表現, 「学習カルテ」, 自己評価

I. はじめに

小学校では2002年度から「総合的な学習の時間」が新設された。それに伴い、「総合的な学習の時間」と教科「音楽」との連携を図った実践方法が開発されつつある。中でも、音楽劇、ミュージカル、モノドラマ合唱等の活動が目立っている。

高見仁志は「<総合的な学習としての音楽劇>における有効な支援のあり方」¹⁾の中で、「総合的な学習の時間」に音楽劇を取り入れるときの問題点として次の2点を挙げている。

- ・音楽劇を通して表現したい感情や思い等が、学習の初発段階から児童・生徒に意識づけられているか。
- ・単元全体において学習活動の一貫性を保証し、感情や思いの変容を促すような支援が設定されているのか。

これらの問題点は、「特別活動」に音楽劇を取り入れるときの問題点にも共通する。とりわけ発表本番までの時間が迫ってくると、指導者にあせりが見られ、子どもの感情や思いが置き去りにされてしまう場合がある。筆者自身、大勢の子どもたちを前に、マイクを片手に一方的に指導してしまった経験がある。そのような反省点を踏まえ、個に応じた支援をできる限り多く取り入れ、一方通行ではない実践を行いたいと考えた。

そこで本研究では、特別活動の領域に属する学芸会におけるミュージカルの実践を取り上げ、子ども

の表現力を高めていく効果的な手立てを探ることを目的とする。

II. 学芸会の位置付け

1. 「小学校学習指導要領」に見る「学芸的行事」

「学芸的行事」は「学校行事」の中に位置付けられ、「平素の学習活動の成果を総合的に生かし、その向上の意欲を一層高めるような活動を行うこと」²⁾と「小学校学習指導要領」に示されている。さらにその中で「学校行事は、児童が日常の学習や経験を総合的に発揮し、発展を図る教育活動であり、各教科では容易に得られない体験的な集団活動である」³⁾と特別活動と各教科との深いかかわりを指摘している。音楽科に限定して考えると、日常の音楽の授業で学習したことを「学芸的行事」で発表することにより、貴重な体験活動を味わうことが可能であるととらえられている。

2. 岡崎市立本宿小学校における学芸会

岡崎市立本宿小学校では、例年11月上旬に「学芸会」が体育館において行われる。まず、「校内学芸会」が全校児童を対象として平日に開催される。そして保護者、地域の住民を対象とした「学芸会」が、数日後の休日に開催される。

「岡崎市立本宿小学校教育計画」には、学芸会の教育目標が以下の通り示されている。

- ・児童の情操陶冶と発表力・表現力の育成、学習の総合的な発表をさせる。

・学級の全員で、協力して練習・発表する態度を育てる。⁴⁾

第1学年、第2学年、第4学年、第6学年は学級単位で劇、第3学年、第5学年は学年単位で音楽を発表する。その他、ブラスバンド部やPTAコーラス、職員による劇などの発表も行われる。学芸会の教育課程における位置付けについて、校内学芸会・学芸会は特別活動の学校行事(学芸的行事)とされ、それに関する準備については該当する教科・領域にて扱うことになっている。例えば、合唱や合奏等の練習は音楽、劇の練習は国語、ダンスの練習は体育、小道具づくりは図画工作、衣装づくりは家庭科、役決めは特別活動の学級活動というように各教科が連携して行っている。

Ⅲ. 研究の方法

1. 分析の対象とする実践

- ・発表題目 ミュージカル『CATS』
(ウェッバー作曲)
- ・対象児童 愛知県岡崎市立本宿小学校
第5学年60名
- ・実施年月日 2001年7月から11月
- ・指導者名 鈴木慎一朗教諭(音楽指導)
野村たづる教諭(ダンス、劇指導)

2. 研究の仮説と手立て

<仮説1>

練習の段階において教師が一人ひとりの子どもに応じた支援をすれば、子どもの表現意欲を高めることができるであろう。

<仮説1に対する手立て>

- ・「学習カルテ」への朱書きや子どもとの対話を行う。

<仮説2>

活動の要所要所において、振り返る機会を設定すれば、子どもは自ら音楽にかかわり、表現力を高めることができるであろう。

<仮説2に対する手立て>

- ・「学習カルテ」に自己評価を取り入れる。
- ・カセットテープや8ミリビデオテープなど録音・録画を利用する。

3. 抽出児の選出

実践を分析的に考察するために抽出児を2名選出した。以下、児童Aと児童Bについて論述する。

児童A	責任感が強く、決められたことはきちんと取り組む。余り感情を表に表さず、常に冷静である。『CATS』に対する初発の感想は「気に入った」と答えている。学芸会では、猫の役として劇にも参加。音楽とのかかわりも深まることを願う。
児童B	おとなしい性格で、常に物静かである。『CATS』に対する初回の感想は「気に入った」と答えている。今回、「ハンドベルをやりたい」という希望で、学芸会に向けて練習に取り組んだ。ハンドベルを通して表現の力を高めていってほしい。

4. ミュージカル『CATS』の持つ教材性

ミュージカル『CATS』は1981年にアンドリュー・ロイド・ウェッバー(Andrew Lloyd Webber, 1948～, 英)によって作曲された。ミュージカル『CATS』の教材性については以下のようにとらえた。

<長所>

- ・リズムカルな『スキンプルシャンクスー鉄道猫ー』や感動的な『メモリー』など子どもたちにとって親しみやすい名曲が含まれていること。
- ・音楽を中心に置きつつも、ミュージカルなので踊りや劇など多様な表現方法へと発展することができること。

<短所>

- ・子ども向けの合唱曲ではないので、音域が広く言葉とリズムの関係が複雑で、歌いにくい部分が多くあること。
- なお、短所については無理のない音域に設定したり、難しいリズムについては反復練習をしたりして補った。

台本は、ミュージカル『CATS』の楽譜⁵⁾やT. S. エリオット著、池田雅之訳『キャッツボッサムおじさんの猫とつき合う法』⁶⁾(1995)の著書等を参考に筆者が作成した。ミュージカル⁷⁾なので歌唱や器楽の他、ダンス、劇等も加えた(表2)。最後のジェリクルキャッツが天上に上る場面では、ドライアイスを使用し、演出の効果を図った。

表2 台本の主な流れ

表1 抽出児

活動	曲目
劇	
合唱	メモリー
劇	
ダンス	ジェリクル舞踏会
劇	
合唱	スキンプルシャンクスー鉄道猫ー
手品	
斉唱	ミストフェリーズーマジック猫ー
合唱・合奏	メモリー
劇	
斉唱	天上への旅

5. 研究の計画

子どもたちは11月3日の本番に向けて、7月下旬より少しずつ練習に取り組んだ。約2ヶ月の期間を「つかむ→深める→振り返る→広げる」の4段階に分け、活動を深めていった(表3)。特に合唱であり、ミュージカルの中での主要な曲である『スキンプルシャンクスー鉄道猫ー』と『メモリー』に重点を置いて学習した。

表3 研究の計画

段階	時期	学習活動	教師の支援
つかむ ↓ 深める	7月	ミュージカル『CATS』との出会い ・お話のある音楽だね ・明るくて楽しいね ・もう一度聴きたいなあ ・聴きながら口ずさんだよ	・CDを流し、『CATS』を演奏してみたいという子どもの意識を高める。
	9月	『スキンプルシャンクスー鉄道猫ー』を歌ってみたい ・CDに合わせて歌ったよ ・ピアノに合わせて歌ったよ ・暗譜でも歌うことができるよ	・難しい部分を取り出して練習する。 ・学習カルテの朱書きや対話を通して励ます。
↓ 振り返る	10月	『メモリー』をリコーダーで吹いてみたい ・楽譜が読めたよ ・一人で練習したよ ・みんなで合わせよう ・ハルドベルを加えてみるときれいだね	・熱心に練習している子どもを認め、称賛する。
		自分たちの音楽を振り返ってみたい ・出だしがそろっていないよ ・高い音がしっかり出ていないよ 正しい演奏法を知ろう ・裏声を使って音が響いてきたね ・タンギングをして音が響いてきたね ・他の曲も練習して覚えたい ・踊ってみたい ・劇をやりたい ・学芸会が楽しみだな	・録音や録画を通して自分たちの音楽を客観的に振り返る。 ・範唱、範奏を通して演奏の仕方を示唆する。 ・他の曲を紹介し、さらに表現の意識を高める。
広げる	11月 1日 3日	校内学芸会…全校児童の前で発表 学芸会 …保護者、地域の人たちの前で発表	

IV. 研究の実際

1. 子どもに寄り添った教師支援

最初に『スキンプルシャンクスー鉄道猫ー』のCDを聴く活動から始めた。そのときの子どもたちの目は、流れている音楽に合わせて熱心に歌詞カードを追いかけていた。歌詞カード1枚による音楽鑑賞の活動ではあったものの、子どもたちはミュージカ

ル『CATS』の世界に引き込まれていた。授業終了時に『CATS』が気に入ったかどうかについて5年2組31名の子どもを対象にアンケートを行った。図1に見られるように「はい」が78%(24名)、「ふつう」が19%(6名)、「いいえ」が3%(1名)の結果より、学級の8割近くの子どもが気に入っていた。授業後、「先生、また『CATS』を聴き

たい」と言い寄ってくる子どもが数名いた。

学芸会指導の最大の課題は、全体・一斉指導に陥りやすいという点である。一方通行の授業から少しでも脱皮する方法はないかと考え、「学習カルテ」を作成した（資料1）。「学習カルテ」には自己評価の他に授業感想を書く欄を設けた。そこに毎回朱書きを加え子ども一人ひとりに直接働き掛け、子どもの思いを引き出し励ました。

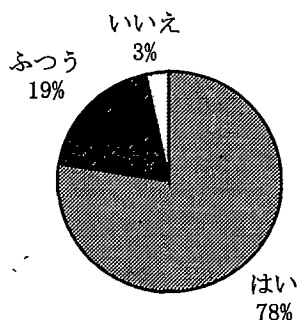


図1 『CATS』が気に入ったかどうか

資料1 「学習カルテ」

学芸会に向けて		音楽学習カルテ		
月 日	目標			
	集中して練習できたか。	A	B	C
	工夫して練習できたか。	A	B	C
	自分の完成度はどうか。	A	B	C
	授業感想			

(1) リコーダーに取り組む子どもたち

『メモリー』は、歌唱の他、リコーダー二重奏も取り入れた。器楽の習得は、時間を要するので、9月下旬から開始した。資料2は9月26日の学習カルテに書かれた子どもの授業感想の一部である。

資料2 授業感想 9月26日

・リコーダーのリズムがよくわからなく、歌は裏声を出すのが難しかった。リコーダーは、同じ音を出すときに、1回多くやったりしてしま

った。でも、前よりは上手にできた。

- ・『メモリー』のリコーダーのリズムが難しい。
- ・『メモリー』のリコーダーは難しいけど、家で練習して本番はその成果を出したいです。
- ・リコーダーがあまりわからなかった。でも音はしっかりしていた。
- ・『メモリー』の低い「ド」ができなくてとつてもくやしい。
- ・今日はリコーダーをやって、分からなかったところがよく分かって少し上手になった気がする。
- ・『メモリー』をリコーダーでふくのが、あわててしまうので難しい。
- ・『メモリー』のリズムが難しい。だからできるようにがんばる。

30名中、12名の子どもたちが「リコーダーが難しい」という感想を書いている。特に「リコーダーのリズムが難しい」ということを訴えている。中には『メモリー』の低い「ド」ができなくてとつてもくやしい」と書いている子もいた。このことから子どもたちが『メモリー』のリズムやリコーダーの低音部分に苦しんでいるということが、つかめた。

このような実態をつかみ、次時の授業ではその点に注意をして授業を行った。難しいリズムの箇所だけ取り出して反復練習したり、低音の「ド」や「レ」を取り出してタンギングをしたりした。

児童Aの学習カルテには資料3に書かれていた。

資料3 9月26日 児童Aの学習カルテ

下線は特に注目すべき箇所として筆者が付けた(以下同じ)。

今日はリコーダーがあまり上手にふけなかった。10/8拍子というところが難しい。でも次の時間には、きちんとふけて、と中までだけど、通せるといいな。歌の方はもう少し声を出して歌えるといい。

朱書き：10/8拍子というテンポが難しいね。

ただ難しかったと書くのではなく、「10/8拍子というところが難しい」と難しかったその原因の箇所を楽譜の中から探すことができている。この箇所は、12/8拍子から10/8拍子になるところでどの子どももつまずきやすいところだった。難しく投げやりになるのではなく、「次の時間には、きちんとふけて、と中までだけど、通せるといいな」から、意欲

の高まりを感じる。休み時間に一人で練習をしている児童Aの姿も見受けられた。

資料4 9月27日 児童Aの学習カルテ

昨日は10/8拍子のところができなかったけれど、今日は昨日よりできるようになった。でも、歌の方の2番の「わすれない」を中心的にできるようにしたい。
朱書き：できるようになっておめでとう。「わすれない」の部分難しいリズムだね。

「昨日よりできるようになった」から児童Aの喜びを読み取れる。できないことができるようになる。このことが児童Aの自信にもつながり、励みにもなっている。その証拠に「でも歌の方の2番の「わすれない」を中心的にできるようにしたい」と次なる課題を自分なりに探している。このような意欲が、児童Aの表現力を高めていくといえる。

(2) ハンドベルに取り組む児童B

学芸会本番2週間前の10月中旬から、役割りに応じて踊り、劇、そして音楽の3つの部門に分かれて練習をする時間を設けた。音楽部門はさらに、ハンドベル、アコーディオンなどに分かれて練習をしていた。音楽が余り得意でない児童Bが自ら「ハンドベルをやりたい」と申し出てきた。ハンドベルは、『メモリー』の曲の一部分を6人で担当し、二声に分かれて演奏することになっていた。

資料5 10月29日 児童Bの学習カルテ

下線は特に注目すべき箇所として筆者が付けた。

ハンドベルがなかなかうまくいかない。
朱書き：よくなってきたよ。

この文章から思うように演奏ができないことが分かる。その原因として、リズムが正確に取れないためお互いにうまく合わせるができないということが挙げられる。朱書きを通して励ます一方、対話を通して支援を行った(資料6)。

資料6 児童Bとの対話 10月30日

児童B ハンドベル、なかなかうまくみんなと合わせるができないから、困っています。
T リズムが難しいね。一度、やってごらん。

児童B (ハンドベルを演奏する)
T お互いにずれてしまうね。一度、ハンドベルを置いて、ドレミ…だけで歌ってごらん。
児童B (階名唱をする)
T そうそう、よかったよ。今度はドレミ…を口ずさみながら、ハンドベルをやってごらん。
児童B 口ずさみながら？
T そう。
児童B (口ずさみながら演奏する)
T うん。歌と合ったね。ピッタリ合っていたよ。
児童B (うれしそうな表情をする)
T もう大丈夫、この方法で練習してごらん。
児童B はい、分かりました。

階名を口ずさみながら演奏する方法を知った児童Aは、地道に繰り返し練習した。「ハンドベルを貸してください」と申し出て昼休みや放課後にも熱心に練習するようになってきた。

資料7 10月30日 児童Bの学習カルテ

ハンドベルが1組とうまくあってきた。
朱書き：練習したかいがあったね。

資料8 10月31日 児童Bの学習カルテ

ハンドベルがうまくなってきた。
朱書き：さすがBさん。

「うまくあってきた」「うまくなってきた」という文章表現にもあるように、児童Bは日を追うごとに正確にリズムが取れるようになり、自信が付いてきた。「自分の完成度はどうか」という自己評価の項目を比較すると、10月29日では「B」と示しているのに対して、10月30日、31日は「A」と示している点からも明らかである。資料9は校内学芸会(11月1日)の後に書いた日記である。「最初はなかなかリズムがとれなかったけど、毎日練習していたらだいぶ1組とあわさったときは、とってもうれしかったです」とできた喜びを文章に表している。「学芸会のおきもお父さん、お母さんがみているのでがんばりたい」と本番に向けての意欲も高まっている。

資料9 児童Bの日記

今日がきいた音楽

い	ろ	の	う	た	い	け	き	と	す	と	ふ	い	か	の	初	は	な	か	な	り	が	ム
す	ま	の	う	た	い	け	き	と	す	と	ふ	い	か	の	初	は	な	か	な	り	が	ム
す	ま	の	う	た	い	け	き	と	す	と	ふ	い	か	の	初	は	な	か	な	り	が	ム
す	ま	の	う	た	い	け	き	と	す	と	ふ	い	か	の	初	は	な	か	な	り	が	ム

本番、こっぴどくもまじめでした。



写真1 ハンドベル隊

2. 振り返りの場を設定

(1) 録音・録画を用いて

9月後半、深める段階の終わりごろになると、「先生、歌詞を覚えたよ」といってくる子どもが出てきた。毎時間、授業終了5分間を使って自分なりの活動の振り返りを行い、朱書き等の支援をしてきた。

資料10は10月4日の授業記録である。録画VTRを流した後、客観的に振り返ることができるようにするために、ワークシートを用意し書く時間を保障した。最初、口の大きさや笑顔など顔の表情に関する視覚的な意見が多かった。特に自分の顔が写っていたかどうかに関心の一つであった様子だったので、「それでは、一体音楽はどうだっただろう」と投げかけ、音楽に意識を向かわせた。そうすると、低音部と高音部の音のバランスに気付いた意見も出され、今後の課題として曲の出だしに気を付ける、高音部の音にさらに響きを付けるといったことが挙げられていった。

資料10 授業記録 10月4日

[凡例] T:教師, C:子ども, A:児童A
数字は発問と発言の順を表す。

- T3 今から前回録画したビデオを流します。鑑賞後、ワークシートに自分たちの音楽のよかった点、反省すべき点を書いてもらいますので、気を付けて鑑賞してください。
(録画VTRを流す)
- C (夢中になって画面を見ている。だれだれが映っているなどのつぶやきの声聞こえる)
- T4 それではワークシートによかった点、反省すべき点を書きなさい。時間は5分間です。
- C (ワークシートに記入)
- T5 止め。鉛筆を置きなさい。それでは発表してください。
- C6 口が余り開いてないと思いました。
- C7 反省すべき点として、笑顔が足りないと思います。
- C8 S君とD君が口を大きくして歌っていた点がよかったです。
- (略) —
- T11 はい、今、口の大きさや顔の表情などの大切な意見がたくさん出ました。それでは、一体音楽はどうだっただろう。
- (略) —
- A14 みんな裏声を使ってよかったけど、最初の部分が低音に負けていると思います。
- C15 つられていなかったと思うけど、高音部の音が弱いと思います。
- C16 出だしの音も少しずれていたような気がします。曲の出だしも注意する必要があります。

①ワークシートを用いて

録音・録画された自分たちの音楽を鑑賞した後、ワークシートに気付いた点を書かせた。それらをまとめると、次のように整理ができる(資料11)。よかった点として、「声大きい」「高音部の声が出ていた」「つられていない」「裏声の部分がきれい」といった声量、音程、声の美しさに気付いた点が多く書かれていた。「S君とM君の声が大きくてよい」といった友だちのよさを探せた子もいた。

反省すべき点として、「口が開いていない」「最初の高音部の出だしが弱い」「最初、少しつられていた」「最初、高音部が低音部に負けている」「顔が暗い」といった口の大きさ、歌い出し、音程、バランス、表情の点を書いた子が多かった。

資料11 気付いた点 10月4日ワークシートより

カッコ内の数は同じ内容の意見の数を表している。

<p><よかった点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・声大きい (11) ・高音が出た (9) ・つられていない (8) ・裏声の部分がきれい (8) ・響いている (3) ・裏声を出せていた (2) ・S君とM君の声が大きくてよい (2) ・大きな口を開いている人もいた (2) ・よくハモっている ・声がそろっている
<p><反省すべき点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・口がしっかり開いていない (12) ・高音部、最初弱い (10) ・最初、つられていた (6) ・高音部低音部のバランスが悪い (5) ・顔が暗い (5) ・笑顔が足りない (2) ・裏声が少ししか出てない (2) ・低い声がかきこえなかった ・下ばかり見ている ・口が余り動いていない ・カメラを気にし過ぎる

ワークシートの記述から、全体的に声量も出てきて裏声も美しく使えるようになってきたものの、まだ高音部と低音部に分かれて歌う出たしの部分が不十分であるということに気付いている子が多いことが読み取れる。次の資料 12 は児童Aと児童Bのワークシートである。

資料 12 抽出児のワークシート
児童 A

★ 気付いた点を箇条書き。

よかった点	反省すべき点
<ul style="list-style-type: none"> ・声かたまたまいい ・高音かきこえ ・今日に比べていい 	<ul style="list-style-type: none"> ・かたを気にして歌う ・歌は音が入らな ・いい声の所を強く ・最初の部分を、はまりき ・口が小さい ・顔が暗い

＜今後の課題＞
うしろ声のときにも、と声を出し、
今日うしろ声の練習したけれど
まだ、みんな声を出せる気がしたから
明日もがんばる。 頑張るぞ
みぶくよ

児童 B

★ 気付いた点を箇条書き。

よかった点	反省すべき点
<ul style="list-style-type: none"> ・きれいな声だった ・つられていない ・はじまりが声かたまたま ・よくハモっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・たかいところもかきこ ・はじまりもうちよと出る ・くらりが大きかった

＜今後の課題＞
もっと大きな声を出す!! とくにたかいところ、
大きな口をあける。
（かんた）
まえよりたかいえかき出した。すじい

児童Aは、友達のよさに気付きながらも、反省すべき点として、「最初の<スキン>をはっきり言う」とアンダーラインを引いて強調して書いている。また、児童Bは「はじまりが声が大きくていい」「きれいな声かきこえていた」といった声量、裏声の美しさに気付いている。

児童Aも児童Bも、録音・録画を利用することによって、自分なりの価値観を持って音楽にかかわり、振り返っている様子が分かる。

②子どもたち同士の話し合いから

子どもたちが発表したよかった点、反省すべき点を板書し、整理をした後、「それでは、これからどんな点に気を付けて練習を進めたらよいでしょうか」と投げかけた（資料 13）。C27「最初の部分、もっと声を出した方がよいと思います」C29「まだ、最初の部分、音が不安定でつられている感じもしたけど…」から、最初の部分に課題が集中していることが、話し合いによって明確になった。そこで「それでは、最初の部分を繰り返し練習しよう」ということになった。この授業では教師がすぐに評価発言するのではなく、自分たちの音楽を録音・録画をし、それを客観的に聴くという活動を行った。さらにワークシートに書く、発表する、話し合うプロセスを経て、自分たちの力で今後の課題を探ることができた。この日の授業感想の中に、「最初の部分の練習を集中してやった。おもしろかった」「今日の音楽の授業は楽しかった」といった感想が多かった。自分の歌っている姿を録画を通して見る楽しさと自分たちで課題を探った満足感が、そのような感想になったと考えられる。

資料 13 授業記録 10月4日

[凡例] T:教師, C:子ども
数字は発問と発言の順を表す。

T21	はい。今、よかった点と反省すべき点を発表してもらいました。それではこれからどんな点に気を付けて練習を進めたらよいでしょうか。ワークシートの今後の課題のところに書きなさい。
—— (略) ——	
T23	それでは発表してください。
C24	声をもっと大きくするとよいと思います。
C25	口が余り開いていなかったの、口をもっと開けるとよいです。
T26	口の開け方、大切だね。他にはないかな。
C27	<u>最初の部分、もっと声を出した方がよいと思います。特に、そこの裏声の部分を...</u>
T28	裏声、いいところに気付いたね。
C29	<u>まだ、最初の部分、音が不安定でつられている感じもしたけど、...</u>
C30	そうそう、低音部のが強くて、高音部が負けている。
T31	どうやら課題が最初の部分に集中しているね。それでは、最初の部分を繰り返して練習しよう。

(2) 子どもたち自身の自己評価を用いて

自分なりの価値観を持って音楽にかかわり、親しむことができたかどうかをとらえるために、自己評価を取り入れた。「A」は80点以上、「B」は50点以上、「C」は49点以下を基準とする3段階の方法で、子どもたちは毎時間授業の最後に自己評価を記入した。その結果を基に、ここでは以下のように数値化し、子どもたちの追及の姿を客観的にとらえたい。

自己評価の数値化<学級の平均を出す式>

$$\frac{(A \text{ の人数} \times 3) + (B \text{ の人数} \times 2) + (C \text{ の人数} \times 1)}{\text{児童数 (32人)}}$$

表4 子どもたちの自己評価の学級平均値

3に近いほど各項目の達成度が高い。

	9/26 深める	10/23 振り返る	10/31 広げる
集中して練習できたか	2.45	2.42	2.48
工夫して練習できたか	1.97	2.35	2.39
自分の完成度はどうか	2.06	2.16	2.13

表4より以下のことが明らかになった。

- ・「集中して練習できたか」の項目は、一貫して数値が高いので、どの段階においても子どもたちは集中して練習できたこと。
- ・「工夫して練習できたか」の項目は、10月23日、急に数値が上昇している。振り返る段階のころから自分なりにこだわりを持って工夫して練習に取り組むことができたと言える。録音・録画などの手立てが有効だったこと。
- ・「自分の完成度はどうか」の項目は、急激な数値の変動はない。それぞれの段階に応じて課題があったからだと考えられる。

なお、抽出児の児童A、児童Bの自己評価は、表5の通りである。

表5 児童A、児童Bの自己評価

評価のAを3、Bを2、Cを1に置き換えて表記している。

		9/26	10/23	10/31
項目	児童	深める	振り返る	広げる
集中して練習	A	3	3	2
	B	3	3	3
工夫して練習	A	2	2	3
	B	2	3	3
自分の完成度	A	2	2	2
	B	2	2	3

10月31日の「広げる段階」でも、児童Aは「工夫して練習できたか」を「3(A)」と答え、それ以外の2項目は「2(B)」と答えている。この理由として、児童Aは劇の中で猫の役をやっていたのだが、思うように演技できず、苦勞していたことが影響していると考えられる。授業感想には「劇の方で、はずかしがらず演技をしたい。もっと力を出しきりたい」と書いていることから読み取れる。

それに対して、児童Bはすべての項目に「3(A)」が付いている(10月31日)。したがって、音楽に対する意欲は高くなっていると考えられる。

V. 研究のまとめと今後の課題

児童A、児童Bの変容を中心に追いながら2つの仮説の有効性を考察した結果、明確になったのは以下の2点である。

仮説1については、「学習カルテ」への朱書きや子

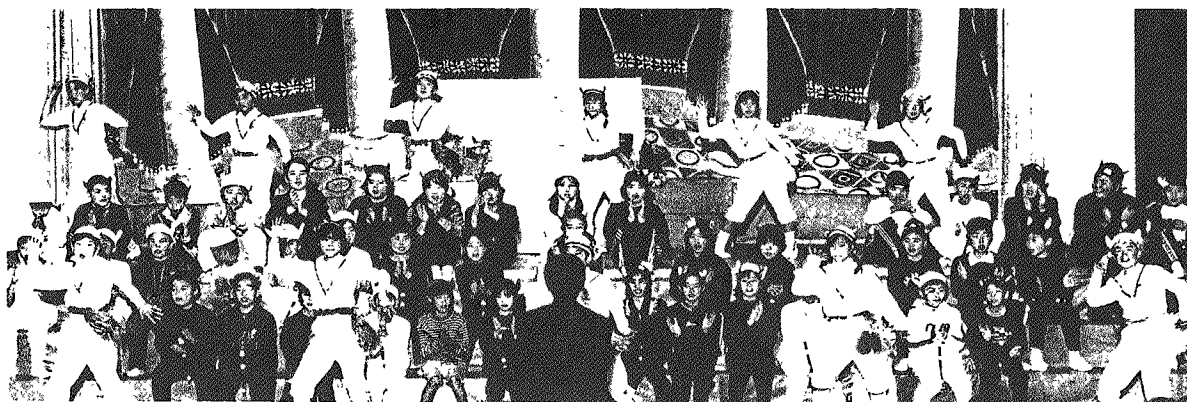


写真3 ダンスしている子どもたち

- 1) 高見仁志「<総合的な学習としての音楽劇>における有効な支援のあり方—実践分析に見られる「教師支援」と「児童の反応」を手がかりとして—」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学論集第4号』2003年, 58頁
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説特別活動編』1999年, 東洋館出版社, 62頁
- 3) 同書, 14頁
- 4) 『平成13年度岡崎市立本宿小学校教育計画』
- 5) ミュージカル『CATS』ピアノ弾き語り, シンコーミュージック
VOCAL SELECTION “CATS” HAL
LEONARD CORP
- 6) T.S.エリオット著, 池田雅之訳『キャッツボッサムおじさんの猫とつき合う法』1995, 筑摩書房
- 7) ミュージカルとは, 「時間・空間・の中で言語表現, 音楽表現, 身体表現を行う総合的な表現活動である」(奥忍「民話をミュージカル化する」高萩保治編『音楽学習のフロンティア』2003年, 玉川大学出版部, 12頁)
- 8) 斉藤喜博『授業入門』1990年, 国土社, 187頁

Title : A Teaching Trial of Music Class Room Learning Collaborated with “Special Activities” : A Case Study of Teaching Practice of “School Play Day” for the 5th Grade Children

Shinichiro SUZUKI (Joint Graduate School (Ph.D.Program) in the Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

Shinobu OKU (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract : The purpose of this study is to examine effective methods to develop children’s musical expression ability in “school play day” of “special activities”. The following hypotheses were proposed and put into actual teaching.

- 1) With individual supports during the process of exercises, children will practice more eagerly to refine their expression.
- 2) By looking back former activities by themselves, children’s musical expression ability will be more developed. To examine these hypotheses, two children were chosen, their learning processes were recorded and analyzed. The following results were obtained: 1) by adding teacher’s comments on portfolio and frequent talking by a teacher to each child on his/her performance, children were push to exercise more actively. 2) Children’s self evaluation and records worked effectively to deepen their expression. Thus these hypotheses were valid to develop children’s musical expression ability.

Keywords : “School Play Day”, Musical, Children’s Musical Expression, Portfolio, Self Evaluation